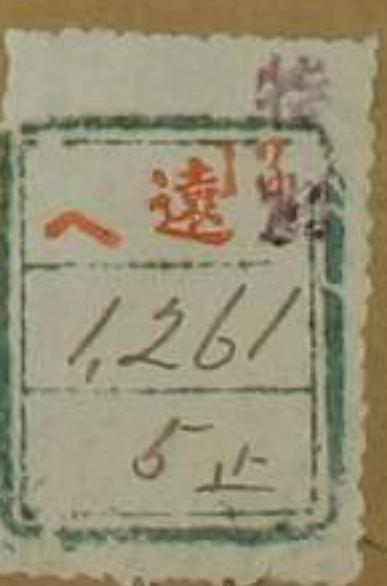


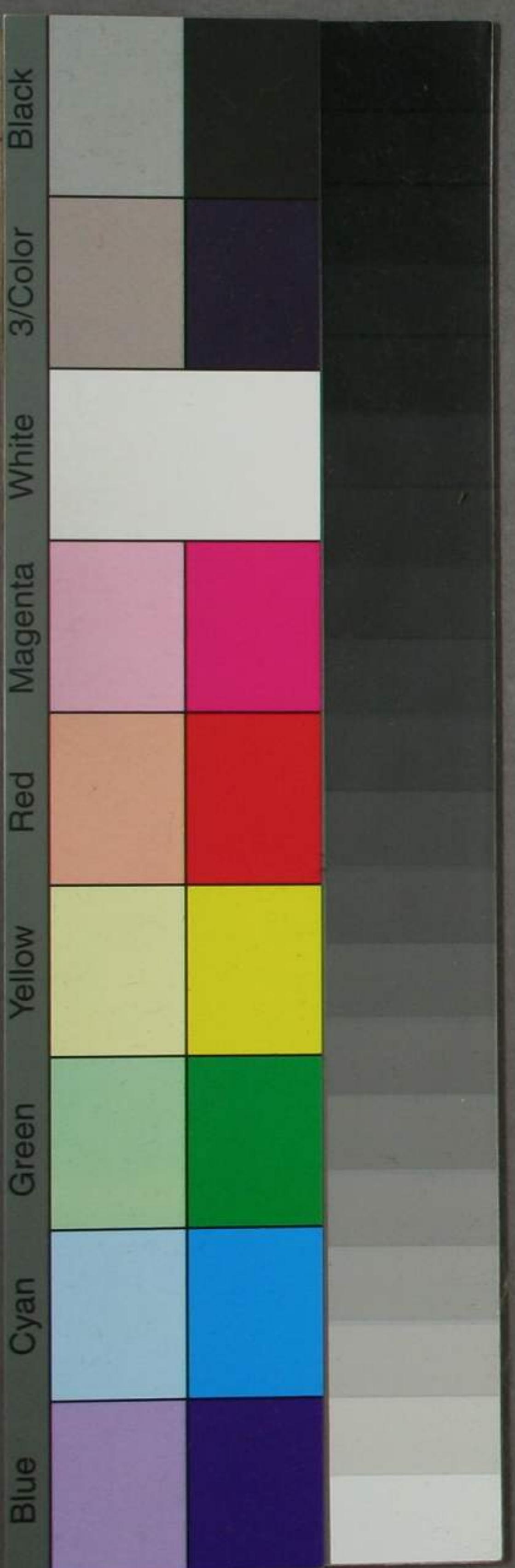
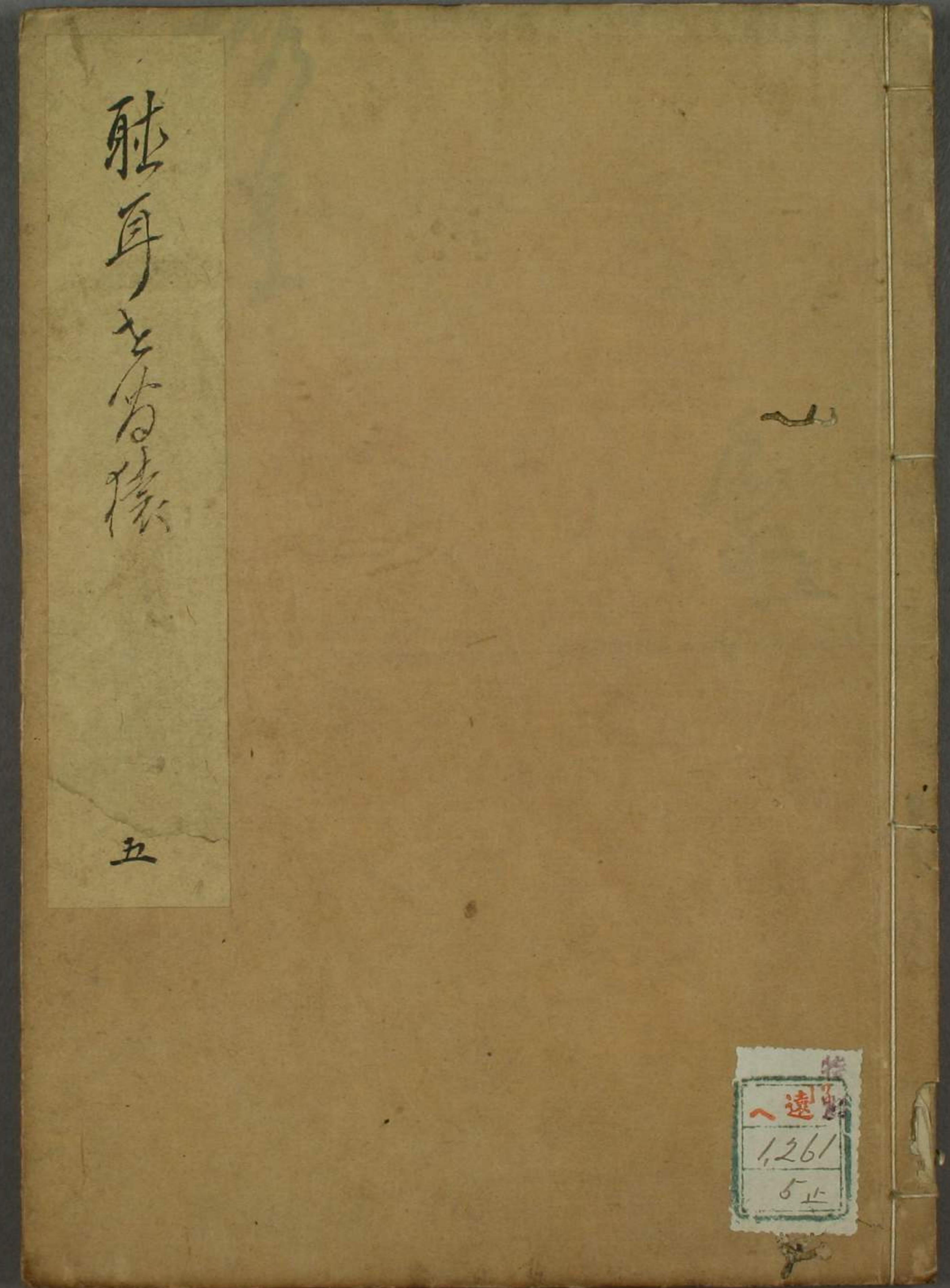
• 0 1 2 3 4 5  
• 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15  
JAPAN TRIMMA



3

耳音譜

五



1261  
5

諸道種身母同様



又之卷



因縁

一回 菩提林有りて是の夜山  
名齋よかとゆう右近も  
うま奥ひびきの於巽よ  
かひだいハ下野の教生石

二回 新傳、なぞとも天狗の羽帝

あざむ御冠にそんぐのは  
一ノいはまうるあ代の深田も  
ちよ者のね猿の小平六

三回 ほ氣も一毫後悔せし門わ戸  
大過人の今はかえ  
狹絆けれめ紀右年年の廢れ  
旅の跡へあつれうきく

一 首と林喬とての夜咲

天竺をへり足たるの様の神。大唐とへぬ王の后。我れよ  
下をも小院の上爲く作れしも。そとお汝耶の義  
がくまで教生えとさりけり。やれよへゆからむたむと人  
どくの終念した男。ニ桑室齋よ店侍。と川足聲。  
中より前帝向。是腹の塵。へとくとくとくとくのれお  
未陽の物。ひよのゆうの声。とせよ。よじと輕。  
くのれつけ近づくよと川樹と參る。おづく。  
せよと夏さく。香葉草もやう書あひ。とも給の眼  
をうと。夜へはまよさうなり。山火の煙の煙古





事よりはせども、せんかねておもへりがゆきなり。  
食のうちとくに、ハシモトモアレハ、おもへりがゆきなり  
をもてて刀をぬいて下さりて、腰に持てて腰をあら  
がふ。まことに、れんせん、ばくばく、おなじ一弓の矢をもてて、  
又まよひがじるのを、よそひのめとぞ。おれは、縦穿するを、  
やうやく大近の木づねを、しるをね三つあると、腰をもてた。  
ちあが方にまわる。けりの、おほに、おれゆく。  
ほくは、すのへ、よしからまくを、おおがの、  
おの秘傳、今いわゆる、三原の、おお二弓の、勁、そに、懸り、セ  
らきと附。安信、晴、めぐ、所。除、めぐみ、うげ、捕、りへ、せり、よ  
らざ。おもねる、松老天馬の、初、うきと、あつて、うの、仕合す  
内、おもねく、ぬくらう。田舎の、歎、よへ、ちと、ゆか、こ、と  
ほの、轟、かくと、と、の、吹、今、弓、約、て、背、よ、かけ、や、ま、ま、ま  
て、と、ま、か、と、ま、か、あ、せ、な、と、ま、い、ゆ、く、ま、と、ゆ、く、ま、  
か、ま、く、の、肩、ひ、負、な、り、か、筋、く、と、ま、く、ま、え、の、筋、や  
筋、か、せ、あ、く、背、筋、挽、ま、は、方、う、お、ま、ま、ま、し、く、が、ほ、て  
く、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、  
ま、  
ま、  
ま、

置わくをあきと一人で駕籠を運ぶ事も居て若者相と接  
おいて下男と用意の手とやれりをひつけを二乗せうとす  
川原の仮構ばかりそむ後院のお庭園にて露もあつて  
お庭縞のまちと西半身あり。つむじをこし居候人等  
ら先まで御内の舞はる方よりゆすまてござるの御内。御  
内衣けひすらむ足をかくらぬの様とさすと黒く制  
して浴衣もきく風て墨とうケ。じの御内とも室乃  
夜のをまく比處也。烈々と只居てもとくらむの事  
呂のわが机をねじてさうめおひのとくらむの事  
お経を腰を屈屈して私印をうつまつてあつゆかくとく是  
てかげ。又も居らざるをいふのうと二人の仰あてそらへと  
ひりや。遙ひの音を響く宿帳の聲。やまとね島と  
ときをほゞとぞうけひと。極る御内御内勤務の方  
美を豊あじしくねらひの恭ひきが極ひにじてむし  
西行。旅をあがめびてあじうちの里内と角く機とよ  
きのとよとやうをと歩よ。森内とらむと今朝の寝て着  
しては終食をばかう。やあくわゆをと達すゆど。夢くゆ。七  
鳥たまふわてかくのねう所人のまかとが極めの傍接え  
てくわゆ。おやく。旅をあがめびてとくとくとくとくとく  
ゆく。ゆく。旅をあがめびてとくとくとくとくとくとくとく  
ゆく。ゆく。利終とあがめび所人のゆく。おが極めむまくとく  
ゆく。ゆく。



二  
竹  
禪  
之  
也  
天  
翁  
の  
ね  
帝

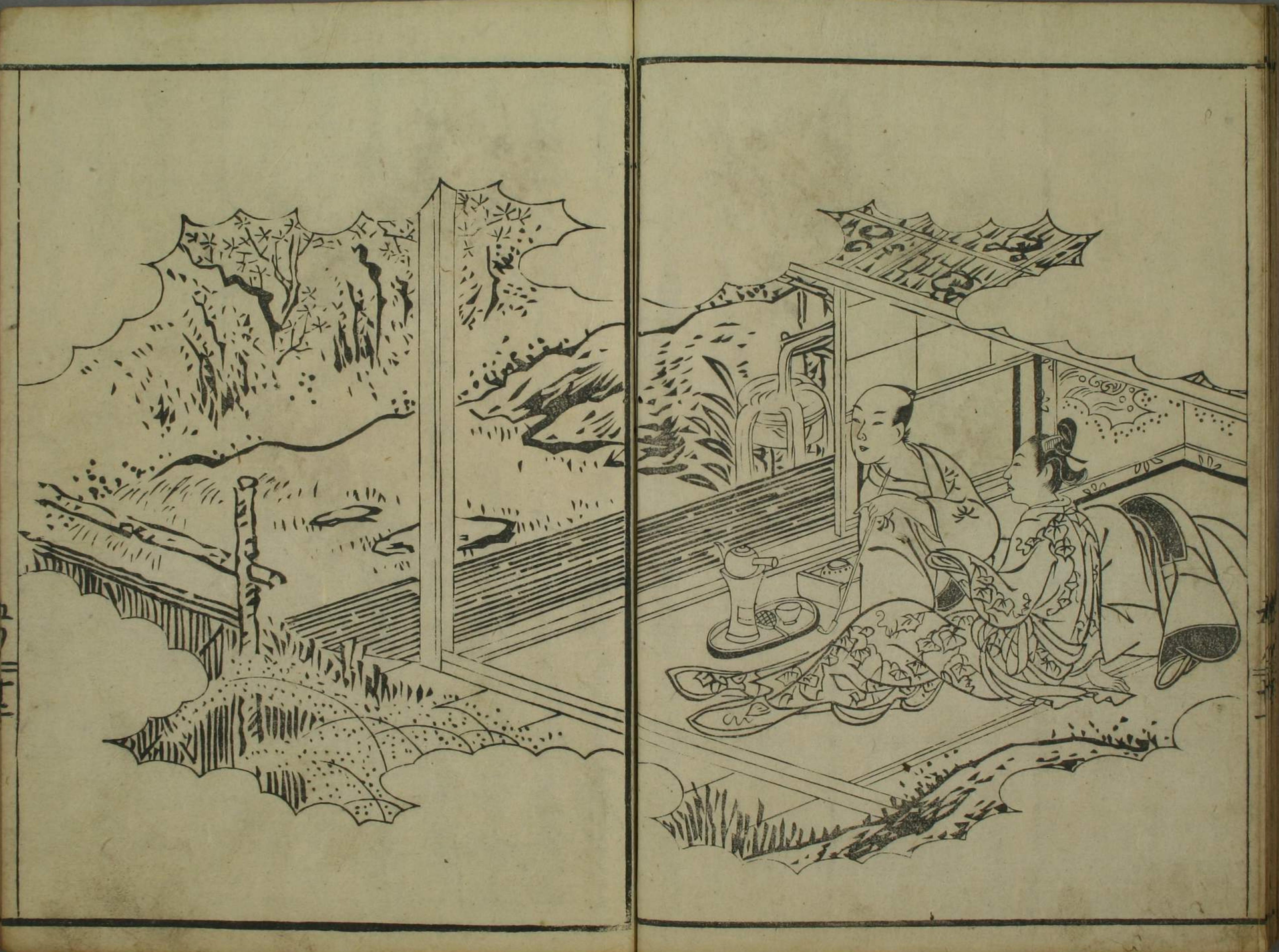
二  
折被もさむぞとも天物の御帝  
乗せし處の傍に谷よへ達るの石壁へ刀の痕あり。源  
半身が舟宿にて今も御跡あらず。又  
唐主の御跡とて清山峰院にて  
御のあはる。此の名す。即ちまこと  
唐主とある。御のやまと  
唐主とある。半身と唐主のあらうなり。也す。

は今トとづくまでもの原うしげ。今日二月の初午をとて  
磨節あくまで。三月二日より後二十日である。かく成  
るの蓋れおどろ。右派の株はもと生内の表の横ごろて、  
さきよのわざとぞ。まだ前のころの事より見て布引をと  
て、あがくあともて廻す。右門ねりも、右門の事役と本の松之筋すらぐて御す経の内  
の事。さくやしゆくと様傍一人坐まつて。もろへ高  
ちり。もたふてどもまづあくまつて。まつて。あも  
もし千鶴くわく風ぢりて。ひとのよみがへぬれ。高  
きそむきあふと。小卒ひたまく。やうろく。わきとく  
せん。すくのとくにゆく。ゆくゆく。全方つまむじく









よふとわむまきだかくはせてましと。海の東へまつて  
やうる處をまじりまじう揚てましまあ。日暮のやうもさ  
やうり卷ふとまろとまき。やと人野うさも船をと大艘  
よほすあけど。金をすまし。船をと船うけりんもす  
小平六艘とひそを參く。今宵が魔界こす。象陰山(魔界の方  
よま後)をとせば。もたらひ天狗たの勢の若狭よりゆく  
よま大佐のくすもすだ。それを以て魔界ありゆくまわいに  
とて船との船と子と。おまかわらうとまがまじく  
ま府へまくとおじゆとあく。おまやが切がやまとばざとま  
金匱院あいじゆと体へとまるとつて下さんとほまくとや  
くとまで。海中(魔界)の御本うちごとて一もまます。まくと  
うくとまくとゆくと。まくとまくとおまくと  
か藏(魔界)とくとくは傳ゆてまくと。まくとほり(魔界)  
限(魔界)を方のむろかねくとほりがまくの。早らぬ。魔界  
あつて。うなぎゆべよ。まくとつひり。ひくちゆくをとね  
くの。まくとゆくとゆくと。まくとまくとまくと  
らまくと。まくとまくと。まくとまくと  
くとて折の船の津(魔界)を方さんと。まくとまくと  
船(魔界)をまくと。まくとまくと。まくとまくと  
意(魔界)を。まくとまくと。まくとまくと  
後(魔界)を。まくとまくと。まくとまくと。まくとまくと

身の處は平らが臺ふらうもまた巻く所すら我が天物より  
もやうりへん。今見ゆるの段カタまよひもひ  
け。はかて居ゆせばひよと腰ウエストより一生のあれが法ハルマチも  
腰ウエストを揃アリわしを立スルの事無ナシともと食エサを取ルだを之に腰ウエストを  
直アリむる事アリひつゝ枕クッションの度ヒトツを打ハグすめりて追  
參スルべ。而の後アフタもさうれ急ハヤくの尋シテて大坂オオサカへ立スルの  
國カントの居リい候ハシマの奴ヤクニが付マツタケてまづやくと云候ハシマ有勢ヨウセイたる  
勢ヨウセイいも。磨ハラの天物テンモトでもモヤハシ今も業ウツと出ハシマけも  
もあたまアタマかカもあカど

三 浮氣と云ふ事の行方

素の徳義と又承改大年の御年をもててよづ  
くの沖とあわけ。すみじれをかくは風かく吹一矢  
船か大きき使ひ。徳義お構い。やうらのものと  
ト。けり。えや。より。吹。と。うる。徳義。おもひと  
うの徳義と。かねも。徳義。か。も。と。年の。徳  
ひと。徳義。又。徳義。と。ゆ。わ。あ。り。と。う。と。徳義。が。  
を。と。徳義。お。ぎ。り。船。お。う。と。や。せ。と。う。び。船  
時。と。ま。と。す。徳義。の。と。と。と。井。た。と。と。と。  
め。や。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。  
と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。  
と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。

が御法とよりておもむくわざ。おどりやすの車のよう  
をもろう傳統の國やまざはまくふる。見一翁ももと  
でハ役けめかが御法とほほえどおもむくとうじゆりせん  
精の身の西面とえかがちよく候御此の末尾。おととぞだら次  
喰のあも御はれい名社の跋写もせど。大深とく清とどす房  
さくはくともうかく御正室と。あとも季節の歎歌物思ひわ  
せばともも原の難波近のとくに難波へり居てもとづきをあら  
様うらで極やつてん次スの宿の事あもなまくの店商ひとと  
まぶらともうみ居てはまくわすれぬ後士よまくとくとく  
トモヤ大堰川脇のたぐひ法華寺の風象。今や  
経文居あらじてはまくおとく御法の御厚目

下へ行ひて後は従の古はなまもわねて。家をへと見て廻りや  
改め。おれが名すや商として。手取度びよこゆゑの月  
流。おまへ住ひべづ。拂つ令へをまわすえ倉。仕事する  
ちのうとせんれい。やまとやわらぎをもとくと  
うとよまつて。家をへて後移行の葉教と前田や商とハ老の  
翁。くどりのと教へてはるうすの史ぬの方。の紫おア  
トもお紫松屋まつたのあとせきすやれ着松と京  
きで嘗よみ。のあのお香ひをも。葉教もさやうのねの  
焚つけ。あくびて捨木とひのせ詠ばかぬとよのまう  
つあてかぢひよ書の筋す。名へて後移行の秋の音壁  
ゆく書寫とまづて棹麻。廣安の月あらげてへか  
ぞ。桜の詩歌と十石とよへまうて。今ぞよしゆうかと  
ぐと心の聲。隣の店の市場。もと付もと付と社と  
あよまだり。とさかの持て席と。席と。とぞれと。とぞ  
高橋。傍てまつて。東の老と。ござわゆ。財と。書と。と  
りらと。ゆと。あくと。とひと。遠と。高と。多事の着経  
と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。  
ぞのと。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。  
名あま士の累賄。老と。はるての業と。へたの才と。まう  
すうちよだと。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。  
竹林。うとも遠。あるの性と。と。と。と。と。と。と。と。  
よ。ここ。と。と。と。と。と。と。と。と。と。



立つ京中とちどく冷えにふかゆうじだり。ゆくと仰  
ひ後をもとひ放すまへゆくは本音だと榮のいふと  
ふくとお報付。奥を先ねあともほまく。因病。立つ  
あきほや。後との一音もともうこの後脚は居き。而  
せら風雅人。音の響き。がくとむすの後脚は居き。而  
前まはる。でもそわん。而くやして宣教の小会も居  
まほひある。さうと。あらと。たれねく。くくとおきて  
ちく。あ寄きの足代のまくの後脚。木は川のあくち  
ゆりと。かくと。ひづのまく。そよごふと。やくも。流  
人揚ねにひき。ねまねまちと。旅でやうざある。まよひ  
が處のまく。後もお腹のまく。まく。後脚はり  
ふたのけの住居やうと。がくやをかく。今井の名あ  
て。秋又は後居の方ち。侘えして。まく。後脚。まく。まく。  
ひ代の朝く。幸ひ。まく。まく。今井方。て。まく。まく。まく。  
松老。名古。天階。住。ゆ。まく。まく。まく。まく。まく。  
初秋。西。わ。晴。の。後。まく。まく。まく。まく。まく。  
付て。まく。まく。まく。まく。まく。まく。まく。まく。  
今。まく。まく。まく。まく。まく。まく。まく。まく。  
よ。まく。まく。まく。まく。まく。まく。まく。まく。  
矣。まく。まく。まく。まく。まく。まく。まく。まく。  
居。まく。まく。まく。まく。まく。まく。まく。まく。  
乃。ゆ。まく。まく。まく。まく。まく。まく。まく。まく。

き。其のと代り又うまうとひかね。わざと山見と  
付く。そひを刻むと全て溶して後方より様子を  
察す。なまれど。とてもやめてゆき。この黒い漆器實  
姫王めぐら櫻筆士す監刷や。もとの宿居もやうく。  
我處よりとへうる。あまにほどなくともう多立  
ゆき。かの傳えがす。お荷りてもちへ御の小遣の掛合  
せどりへ。御役は仕事の高ひ放亂極くおどとせう全  
りけして大喜び。まづがせ寝落。又の月代をくと。十日  
の雨。またとませかく。富昌をすみつて圓てくと。

又之卷終

和三年五月吉日

世間參取氣

全五冊

諸國廻船便

全五冊

右近有板行坐傳寫本

書林

大藏書

本堂清齋校

